

The 13th International Congress of the International Radiation Protection Association 印象記

河野 孝央

Kawano Takao

スコットランドの首都エジンバラから西へ70 km ほど行った所にある産業と学問・芸術の都市グラスゴーにおいて、平成24(2012)年5月13~18日の6日間、第13回国際放射線防護学会国際会議(The 13th International Congress of the International Radiation Protection Association: IRPA-13)が開催されました。

グラスゴーは、スコットランド最大の人口を有し、エジンバラとともに、スコットランドの2大拠点となっています。市の高台にはゴシック様式のグラスゴー大学校舎がそびえており、そこから南方のクライド川を見下ろす位置に、国際会議が開かれたスコットランド エキシビション&コンファレンスセンター(The Scottish Exhibition & Conference Centre: SECC)があります。センターにある左側の鎧をかぶせたような建物で、開会式や閉会式のほか、受賞講演、市民講演会、プレナリー発表などが行われ、また右側の三角形の屋根をした建物では、登録受



写真1 スコットランド エキシビション&コンファレンスセンター

左の建物：開会式、閉会式、市民講演会など
右の建物：受付、一般発表、企業展示など

付、一般口頭発表、ポスター発表、企業展示などが行われました(写真1)。

IRPA 国際会議は4年ごとに開催されます。私が最初に参加したのは、平成12(2000)年の第10回広島会議でしたが、早いもので、あれから12年になります。今回の第13回会議では当初、11件のテーマに分けてアブストラクトの募集が行われていました。しかし、グラスゴーに来てから知ったプログラムでは、福島第一原子力発電所事故が緊急テーマとして追加され、12件のテーマで会議が構成されていました。以下、その12件のテーマです。括弧内の数字はそれぞれ、サブテーマの数を意味します。

1. Biological and Health Effects of Ionising Radiation (3件)
2. Measurements and Dosimetry (6件)
3. Radiation Protection System Development and Implementation (7件)
4. Stakeholder Engagement and Involvement (4件)
5. Non-Ionising Radiation (10件)
6. Planned Exposure Situations: Industry and Research (9件)
7. Planned Exposure Situations: Medicine (9件)
8. Planned Exposure Situations: Radioactive Waste Management (6件)
9. Emergency Exposure Situations (6件)
10. Existing Exposure Situations (5件)
11. Protection of the Environment (5件)
12. The Fukushima Accident

参加者は世界各国から1,500名にのぼり、口頭で300件以上、ポスターで1,000件以上の発表が行われたと聞いています。口頭発表は、プレナリー、テクニカル、シンポジウム、フォーラムなど6種の形式で進められました。このうち最も多かったのはテクニカルです。230件以上の発表が、6か所の会場において、同時並行で進められました(写真2)。またポスター発表は2組に分けられ、各組、2日間にわたって掲示し、掲示した初日と翌日のそれぞれに1時間、合計2回で2時間の発表と質疑応答が行われました(写真3)。私は前半の組でポスター発表を行いました。演題は「Radiation Education for High School Students Using Potassium Radiation Sources」です。これは核融合科学研究所に来所する高校生を対象に、昨年より開始した“放射線測定実習”の実践研究を報告したものです。この発表において参加者との議論で特に印象に残ったのは、各国が日本以上に、放射線教育を福島第一原発事故に関連した問題として捕らえていることでした。例えば、国の違いに基づく放射線教育の比較研究を進めていたオランダの研究者は、今後、原子力発電を継続させるか否かは、専門家たちに比べ絶対的に人数の多い一般の人たちの意志に大きく左右されながら決まるだろうから、一般の人たちに対する放射線基礎教育が大事である、というような意見を述べていました。これは福島第一原発事故が世界に与えた衝撃の大きさを物語っていると思います。

放射線教育そして福島第一原発事故いずれの場合にも、口頭発表が1回のセッションでは納まりきれず、放射線教育の場合には3つのテクニカルセッションに分けられ、2日間にわたって、また福島第一原発事故については、3つのテクニカルと1つのプレナリーセッションに分けられ、3日間にわたって行われました。なお、放射線教育と福島第一原発事故については、ほかのセッションの中でも何らかの形で触れられていましたので、ほとんど毎日、発表の対象になっていたような印象でした。事故の当事国ではない世界の各国が、福島第一原発事故を教訓



写真2 6か所の会場において同時に進められたテクニカル発表



写真3 各組2日にわたって行われたポスター発表



写真4 閉会式の様子

に、一般国民を対象にした放射線教育が大事であることを再確認したように思われました。

最終日、クロージングセレモニーの前に、会議の総括が行われました(写真4)。12件のテーマごとに、“現状”と“今後(チャレンジ)”という形で、“まとめ”が示されました。個人的な見解になるでしょうが、このまとめの中で、特に印象に残ったフレーズがあります。福島第一原発事故セッションのスライドに映し出された“Need to focus on public trust in authorities”です。“関係当局は国民の信頼回復に力を注ぐべきである”と意識できないでしょうか。第13回IRPAグラスゴー会議は、日本の一国民として、世界の中の日本を、いろいろ考えさせられる国際会議でした。(核融合科学研究所)